

令和 6 年能登半島地震における災害ボランティアセンター派遣活動報告会兼協働型災害ボランティアセンター運営研修における基調講演(令和6年11月19日)

【講師】

一般社団法人 BIGUP 石巻の代表取締役理事 阿部由紀 氏

宮城県雄勝町社会福祉協議会に入職。2005 年の市町村合併に伴い、石巻市社会福祉協議会の職員に。東日本大震災当時、石巻市災害ボランティアセンターで中心的な役割を担い、その後、生活支援課長、ボランティアセンター長等を務めた。石巻市社会福祉協議会を退職後、BIGUP 石巻にて石巻の復興、そして全国各地の被災地で支援活動を実施。令和 6 年能登半島地震・大雨災害を受け、発災直後から、現在においても継続的に現地支援活動を実施。

【講演】

ご紹介いただきました阿部です。宮城県石巻市から来ております。

これから僕が話をするのは当時石巻市社会福祉協議会の職員として活動した部分と、それから今回の能登地震において、自分自身が NPO として、ずっとスムーズにほぼ進みながら活動してきたことなどを報告させていただけたらと思っていますし、ボランティアセンターというものがなぜ社会福祉協議会が担うようになったのかみたいなどころのお話なんかもできたらいいかなと思います。どうぞよろしく願いいたします。

まず、自己紹介を簡単にさせていただきます。

私、漁師の息子で育って 4 代目でしたが、漁師をしてこれから食っていくって時代ではないということで、水産高校卒業した割には、福祉の道を志して、そこから路線を変更していきます。そこから私自身がたどったのは、最初は民間のコカ・コーラボトラーズというところで 2 年ぐらい営業をして、そこで営業を学びました。宮城には東北福祉大学という大学がございまして、なかなか就職難でもありましてね、福祉の業界は。ですので、私自身は 2 年近く（コカ・コーラボトラーズで）営業を学びました。（営業していて）商店街歩いてみると、お父さんとお母さんが経営しているお店が多くて、お母さんたちとしゃべる方が非常に多かった。お父さんたちが経営している部分より、お母さんたちと仲良くやった方が受注がもらえたのを結構覚えています。ですから、街中に転がっている部分っていうのは、実際どんどん変化をしているというのを当時から感じておりました。

社会福祉協議会に入ったのは平成元年で、そこから 33 年間、社会福祉協議会で勤めました。54 歳のときに、震災から 10 年ということもあり、これからの人生、私大変お世話になった側の人間ですから、これからの人生は、そうした恩返しも含めた人生もありかなということで、1 年間の引き継ぎをし、55 歳で退職をして、そこから 10 年間 65 歳になるまでは現役をやりたい、10 年間やって年金もらってという感じのイメージで、かみさんに相談をしています。

自分自身が今度は恩返し（する番）ですので、自分の東日本大震災の折に、いろいろ思っ

たことがあります。それは先ほどの挨拶の中でもちらっと話したように、なぜ社会福祉協議会のボランティアセンターをやらないといけないのかという疑問であったり、それからの福祉のあり方、今からの福祉のあり方、それにいささか疑問を持っていたというのもあるので、自分自身が田舎の出身ですから、当時僕が最後の青年団の団長をして、僕の後継者がいなくなって青年団というのをなくすことになったのですけれど、そういった文化みたいなものがどんどん薄れてきているなという中で、社会福祉協議会が何をやっていけばいいんだろうかというのを、疑問や不安に思いながらやってきたというのが実情です。

親父は海で亡くなっています。僕が20代の時に海で死んでいます。おふくろも他界して、かみさんと僕と2人だけになったんで、娘、息子は、例に漏れず、大都市に消えて行きました。なかなか石巻に戻ってくるということはないでしょうね。今は、孫ができておじいちゃんになりました。おじいちゃんとしてのその責任のあり方を考えさせられています。

高度経済成長から今まで働いてきた先輩方も含め、僕ら、ぬる湯に浸かった中で暮らしてきて、社会保障制度がどんどん変化しました。

地域の中で、「地域が元気に」みたいな制度政策がどんどん変わってきて、介護保険制度が生まれたときにこれは危機だなと思いました。そこから社会福祉協議会がやるべきことは何だろうと考えさせられました。

そういうのがあり、かみさんの親父とおふくろですけど、県外に住んでいたのも、雪深いから、「今一緒に暮らさないか」と誘い、去年の11月に2トントラックを僕が運転して、引っ越してもらい、今一緒に暮らしています。2人とも健康とはいえず、雪かきを毎日する生活、厳しい自然の中での暮らしは負担が大きいので、今は一緒に暮らしております。

この写真は大川小学校です。小学校の名前を聞いたことがありますか？。石巻市で、児童と教職員がたくさん犠牲になってしまったところのピークです。

これは、6月の写真です。まだ水が引いてないんです。これほど酷い状況であったので、大川地区へボランティアの皆さんにどう入ってもらうかをNPOの方々と打ち合わせをしているときの写真です。彼は日本財団の方で、打ち合わせをこの状況の中でやっていました。

大川小学校と触れますと、僕はバスケットの指導者もやっていたので、大川小学校で亡くなった児童の中には教え子が3人おりました。非常に思い空気がありました。僕の学校は（海から）山をひとつ隔てた地域です。誰も死んでないんですよ。大川で何故死んだのかということには、やはり思うところがあります。

僕のところは昔からその津波が来る地域ですから、地域の人が、異動があり転勤族の小学校の先生方に話して、「先生、私はすぐに逃げなきゃ駄目だよ」と言って、地域が裏山に逃がして、それで、児童はほとんど無事でした。児童1人が、迎えに来てしまったおじいちゃんと一緒に亡くなってしまいましたが、あとは学校に居た子は全員助かっている地域でもあります。あの頃にそれを言い出せなかったっていうのは当然ありますね。悲惨な状況であったので、大川の隣の地域の方は、僕らの地域は全員助かったなんてことは、口が裂けても言えませんでした。地域が強いというか、地域がしっかり学校を守ったというのは、自慢し

てもよいのかなと僕は思っています。

津波は、あまり群馬県だとね、そんなに意識が無いでしょうから、表現するのが難しいですが、僕ら（の地域）は海のそばで、僕が暮らしていたところは18メートルの津波に呑まれました。跡形もなく家は、基礎部分を残して全部なくなりました。一方で、堤防が今たくさん作られています。無駄だなと思いますよね。国権の仕事に文句言うつもりはないですけども。ああいうものを作ったって人の命は守れないと思っています。それよりも避難行動のあり方であったり、自主防の組織のあり方であったり、地域でやるということが一番大事だろうと私は思っています。だから、先程話した小学校の話も出させてもらっています。

海が全く見えないような堤防ができて、全く意味をなさないとするのは、千島列島沖地震で（生じる）津波は東日本大震災をはるかに超えると予想されているからです。15mと言われています。その津波は、僕らの地域に入ると倍になるので30m近い津波になるのは分かり切ってます。リアス式海岸という名称をご存じだと思いますが、リアス式では、受ける津波（の全量）が扇の要に集中してくるので、結局どうしても上に上がってくるんですね。これが一気に去っていくので、堤防は反対に（海側に）倒れます。今の堤防って、昔の堤防と違って台形に作られているので、今度は水が抜けなくなる恐れがある。いつまでたっても大きな水たまりの中で暮らさないといけない可能性も否定できない。倒れない分ですね。当時は反対側に海側に堤防が倒れます。引き波の方で倒れるんです。来た波を抑える堤防はあるけれども、一方で入った海水が逆さに行くと、堤防は反対側に倒れる。だから台形型にしたけれど、結局、それじゃ海水が抜けないことに多分繋がると思います。そういうのを思いつく地域で活動することが今大事になっています。これ洒落にならない。遊びじゃない思っていて。僕自身はやっぱり海の子なので、海の怖さを知っています。親父も海で死んでますからね。今は、子供たちと接点を持ちながら、「どう、海と一緒に暮らすのか」みたいなところをやってます。

皆さん群馬（県の人）だと、線状降水帯ってありますね。線状降水帯は10%しか予測できないですよ。残り9割は予測不可能なのですね。私もすぐ、線状降水帯を食らいましたけれど、9月の大雨でワイパー1個も効かないんですよ。前が全く見えない。そんな中で運転して事故を起こしている高齢者の車がありました。何で出たのだろうと思いました。私自身も、帰らないといけなくて、出発はしたけれど停まりました。走れなくて。それを突撃するとああいうことになる。だから過信は、禁物だなと。あと地図はあのとき、レベルⅢだったんですね。予測は、それがレベルⅣ法になり、レベルⅤになった。一旦ですね。生まれて以来、見たことがない雨が降っていました。だからこれでレベルⅢということは無いよなと思いました。皆さんもその大雨を体感なさった方も多いのではないかと思います。ほとんど1時間で、みるみる小さい川は増水して溢れて、僕が外側に鉄骨のある建物の上に登って見た瞬間は、上流はかなり溢れていた状況です。あの状態ではすぐ逃げられません。

だから、僕が今ここで何を話せばいいのかというと、僕はやはり婆ちゃん子で、婆ちゃんからチリ地震津波、昭和35年5月に起こった津波の話をずーっと受けて育ったし、三陸の

明治の大津波も、私自身もばあちゃんに、ずーっと教え込まれて、本当にビビリなぐらいの人間に育ててもらいました。おかげさまでだから、私、先程、言いましたように、家建て直すときに、今から26年前に家を建て直したのですが、津波が来る恐れがあるので、その地域から離れて、内陸に家を建てています。かみさんに話したのは、「津波が怖いから津波が来ないところに家建てるよ」って言いましたが、かみさんピンと来てなくて、「何の話？」っていうから、「いや、そのうちわかると思うよ」と（伝えました）。俺の代なのか息子の代なのか、孫の代なんか分からないけれど、土地っていうのは継承するので、だからあえて内陸に建てないと、大きな災害が来たときに対応できないだろうと。前に居たところの僕が家を建ててれば18メートルの津波で全く、家自体がなくなっていたでしょう。僕は内陸に建てたので大丈夫でした。「お父さん、初めて100点だ」なんて言われたんですよ。ちょっと待てと。今まで何点だったのだろうなと思うんですよ。今が100点？ 150点とか200点もらえたならよいですが、今が100点だと。やっとな、かみさんは俺が言うことがだんだんわかるようになってきました。

僕は、家族をどう守るかが一番最初にあって、自分の家族、それが一番最初じゃないですか。地域をどう守ろうかなんて考えているようじゃ、守れない。まずはご自身の安全。それからご家族の安全ってのが一番最初にあって、それから隣近所とか地域になっていくのが普通なんです。

大体、地域で頑張ってみんなで協力し合おうなんて言うけれど、自分は大丈夫なのという話をどっか置いていってるような気がして、何か性善説で自分は助かる的な要素があるのかもしれないけど、そんなに、自然災害って甘いものじゃないです。だから、そこはしっかりと、これからも継承していかないといけないことだと思っています。

僕が孫子の代にどう継承していくかっての非常に大事だと思っていて、必ず言葉悪いですけども死ぬ側に行けって息子に話してます。死ぬ側に立つと、用意をする。死ぬ側に立ってないから用意できない。だからピンとこないし、例えばこちら辺で、線状降水帯ってあるよねってだけ皆さんもしかしたら知ってるかもしれないし、1回大雨体感した人は、そういった意味では、ああいう雨降るのかなぐらいのイメージはあるけれど、自分が飲み込まれるところまで想像しないと準備をしないですね。

今回も、石巻では、おじいちゃんはたまたま内陸で仕事をしていたので（助かって）、おばあちゃんだけ津波に飲まれて亡くなったというおじいちゃんによく合うんですが、3人ぐらい訪問してます。おばあちゃんたちって料理もできるし社交性もあるけれど、おじいちゃんたちって、ずっと連れ添った奥さんを失ったときって無力ですね。結構無力な人が多かった。結局、コンビニで飯買ったとか、レンジでチンするようなご飯を買ったり、というような生活でしたね。それを何とか打破して、自分で炊事ができるように、暮らしを立て直していけるようになっていうことで、社会福祉協議会として、その相談支援に保健師さんと一緒にあたっていったというのが、最初の頃のボランティアセンター運営をしながらやったことなんです。

これ珠洲市の場合は、1月2日に僕は家を出て、当時の珠洲は5月にも地震があったので、その時に知り合いになったお父さんから「阿部ちゃん、津波も来ちゃって、俺ん家がやられちゃったから手伝ってくれよ、片付け手伝ってくれないか」ってのが最初でした。

僕はNPOなので、組織ばっていないので、すぐその日のうちに支度を整えて（出発しました）。軽自動車のバンの後ろをたまたま12月末に改造していたので。寝れるようにですね。それと一緒に、1月4日にやっと珠洲市までたどり着きました。珠洲市に辿り着いたときは、報道よりも酷かったです。皆さん報道を見たと思いますが、報道よりも酷いんです、現場は。報道って本当につまみ食いをする感じですよ、報道なんてのは。意外と奥まで入っていけなかったんです。だから、報道より（状況が）きついなという印象がありました。津波の報道はあまり無かったと思うけれど、津波も4m~5m位のが来て。右側の写真は津波が来て火災が起きた現場です。輪島と一緒に珠洲でも火災もありました。輪島の方がね、非常に大きな火災でしたけれども。珠洲でも一部こうした焼失した地域があります。

それから輪島も珠洲も能登町も穴水も全部そうですけれども、道路という道路がほとんどこういう状況で、家が倒れこんできて通れないような状況でした。ですので、ボランティアを県がストップしました。ボランティアさんまだ来ないでくださいっていう、知事が案内をしました。あれには賛否両論あったと思いますが、私は正解だと思っている人間の方です。というのは、珠洲まで行ける道路、輪島もそうですが一本しかないですね、途中までの。あの道路にボランティアの方1万人とかをストックしていた部分で放出したら、車何台あそこに駆け寄るかねって考えたときに、ただでさえずっと渋滞してるんで、それが救急車が往来している道路です。自衛隊も通ります。警察車両も消防車両も通ります。その道しかないから（ボランティアが行くのを許せば）邪魔になるんです。（被災地に親が住んでいれば、その）息子や娘だって親父とおふくろのこと気にかけて行くわけじゃないですか。それでも渋滞するので。だからボランティアの方よりも救命の方が優先されるべき。これ当然の話だと思います。ボランティアの皆さんの中には、「何で止めるんだ」みたいに言う方もおられますが、実際、渋滞と酷寒の中で食料がない、便所もない、水もない。その中でボランティアの皆さんが行ったとて、かえって迷惑に近い話の方が多くなるのではないかなと。だからあれは、県が止めてある程度正解。ただ、いつ開けるか、いつ、解除して、（ボランティアに現地へ）来てもらえるかという話は、また別の話かなと思います。

津波が来ると、実際こういう形になって、家も海の方に持っていかれましたし、実際にこの地域で津波で36人が亡くなっています。避難誘導された方、消防団員の方、痛ましい40歳代の命が失われているわけです。人より余計に逃げないと、命なんて助からないですね。私自身は津波も見えてないんです。だから助かる。津波を見た人はぎりぎり助かった人ですね。私は反対の方に逃げたので、だから助かると。婆ちゃんにちゃんと教育を施されたので近づかないですね。皆さんも多分（津波を）見たい気持ちあるのですよ、ちょっと。どこかで見たい気持ちはあるけれども、それをやっちゃって失敗するケースは、自然って、津波って60cmもあつたら人は死にますので、皆さん水の流れだと思ってたら大きな間違いで、あれ

には鋭利な刃物みたいなものも (含まれて)、一斉に 40 km/h のスピードで流れてくると思ってください。僕の先輩で、電柱に縋っていて切った人が居ます。足一本無くなったんですよ。(津波は) ただの水が流れてきているのではなくて 40 km/h のスピードでいろんなものが一緒に流れてきてるんです。泳ぎが達者だから大丈夫だなんてのはあり得ないですね。水の流れには逆らいきれないし、あの水を飲んだら大変ですよ。ヘドロも入ってますからね。良いことは 1 個も無いですね。

私の叔父さんで、電柱の上に登って何とか助かった人がいます。流されて、たまたま運がよくて電柱がぶつかって。私のおふくろの弟なのですが、電柱の高くに登って助かりましたが降りてこられないぐらいの高さに居たようです。もう十何 m 位の津波が来たから一番上まで上ったらしいです。怖くて降りられなかったって。その位の波には、人は対応できないですね。

(能登の) 地震も、今回、1 月 1 日ですよ。皆さんもそうでしょうけれど、家族団らんで。珠洲は、僕は珠洲のことしか知らないかもしれないけれど、やっぱり話を聞くと、今からこうね、いっぱい飲もうかという。夕食の支度をお母さんも終えて、お父さんとあと息子たちと、今から一杯やろうか位の時間帯じゃないですか。

今から、(次の) 1 月 1 日ってあの人たち何を思うのかなって考えるんですよ。我々は余所から言える人間なので。あけましておめでとうございます。謹賀新年。こういうムード。テレビもそうですよね。彼らはテレビをつけないんじゃないのかなって思ったり。あけましておめでとうっていう言葉、言えなくなる人がおるんじゃないのかなっていうのは、やっぱり胸をぐっと締め付けられるような思いですよ。なぜ 1 月 1 日なんだろうっていう思いが非常に高いです。挙げ句に 9 月 21 日に豪雨災害。私の背丈ぐらい土砂が入ってます。テレビ報道でそこまでの放送は無かったかもしれませんが、僕が見ていた中で、山の方、山手を見たときに、茶色くなっていたのが右側の写真です。うわ、何か流れてるなど。流木がワーンと押し寄せてるようなものも、何となくわかった。ただ見には行かなかったですね、危ないので。やはり、地震があって山が結構崩れたんですよ。豪雨が降って、今まで堰き止められていた土が一気に下の方に流れてきたというのが現状かなと思います。住民の方には、これはもう二次被害ですよ。1 年以内に、こうしたことが (続けて) 起きるのは今までの災害でも聞いたことがないです。

阪神淡路の大震災であったり、あと東日本大震災も大きな災害ではあったけど、奥能登の災害ほど、立て続けに、こんなにやられるのは無かったんじゃないのかなと。

それから、東日本大震災のとき、石巻市でしたが、1 時間も (車で) 走れば洗濯もできたし、ものも買えました。ガソリンだけは無かったけれど。奥能登の災害って、8 時間も 9 時間も走って金沢までいかないと (できませんでした)。当時ね。あれは苦痛以外の何物でもなかったですね。トイレとかもなかなか届かないんですよ。やっぱり沿岸の地域の人達にはまとまりがありました。お母さんたちのために、おじいちゃんたちがやってくれたのは、皆さんご存じの単管パイプで (組んで) ブルーシートで囲って、そこにポータブルトイレを置

いて凝固剤を入れて女性だけのためのトイレを、市民センターみたいなところの裏側に、おじいちゃんたちが設置してくれて、女性が管理をしました。お父さんたちはどこでやってんのかな?と思ったら、「お父ちゃんどこやってるんだ?」と言ったら「日本海」って指さしましたね。日本海で、岸壁でやるしかないんですよ。僕もトイレがこれほど無いのが、初めて分かったので、日本海で初めて、父ちゃんたちと一緒にになってそこでするしかなかった。そういう生活って、想像できないですよ。最初の頃は役所に数台、仮設トイレが届くレベルですから。

そこから各避難所にどんどん届き始めるけれど、道路が寸断されていますから。大型（トラック）なんか全く入って来れない状況でとなると、そういう状況を招くんですね。

自主避難、皆さんは、避難所は何か小学校、何か中学校に行くというのが頭の中に入っていると思いますが、そこまでたどり着けるとは限らないんですね。集中豪雨や地震だと。道路には亀裂があるし寸断されてる可能性があるんで、（奥能登の）皆さんは自主防災的な一番近いところはどこでという具合でした。例えばビニールハウスだったり、お寺さんだったり。あとは地域の自主防災のための、地区公民館みたいなのところだったり。学校には行けずに、そうしたところで暮らされてる方が多かったです。これが奥能登の場合、だから行政も把握しにくいんですよこれは。把握するまでにすごい時間かかる。行政も行けないんですからそのポイントまで。これはしんどいでしょう。どうなっているのかと思って僕ら行ったら、やはり、自分らでちゃんと井戸水汲んで、野菜を畑から取ってきて、それでちゃんとお母さんたちが拵えて、野菜炒めだ、具沢山の味噌汁だっけの作ってくれていて。お父さんたちは何してるのかなといえ、家の掃除とか、海岸の清掃とか、あと泥棒が来ないように、津波が入った地域だと、ブルーシートでね、玄関を蓋したり。やはり津波で突き破られてますから。それを直したり。

僕と一緒に、お父さんたちは泥棒対策して。当時、筆筒預金を皆さん持ってるからね。盗まれちゃったっていう人やっばりいますよ。こういうときに来ちゃうんですよ泥棒も、一緒に。速いですよ足が。お米を盗まれた、何盗まれたって、家に居ないからね。家に居ないで避難所にいらっしゃるので皆さんは。筆筒預金しているばあちゃんなんか、やはり10万円盗まれたっていう。ここに居てもお父ちゃんに言えないんだよねって。10万円盗まれたんだけど、あんただけに隠さず言っとくけど、10万円やられたわって。すぐ泥棒も来るんだってのを頭に入れておかないといけない。今のご時世、危ない話なんですよ。

ただ、ここでやってほしいのは、一番下の方に書いた、生活支援が大事です。炊き出しの支援活動っての非常に大事になります。生きるっていうテーマだからです。僕らもボランティアで入って、養生（の作業などを）したりとかしてましたけれど、実際は炊き出しをやる人たちの方が圧倒的に多かったですし、DMAT、医療系の、日赤の先生たちがチームを組んで住民を救ったりとか、避難所で体調悪い人たちを訪問して（見て）くれたりするDMATというのがありますが、彼ら助けた人数は非常にあるはずなので、数的にもっと出したら良いと思うし、多分彼らが居たからこそ助かった命があるはずなので。あと今、DWAT、

Wのやつですね、これは社会福祉の相談支援活動なのですけれど、それもあわせて入って来たらよかったなと思います。

というのは、やはり生活を、暮らしをどうしようかとなると路頭に迷うんですよ。

家を失って、それでこれからの生活って。もう皆さん家が倒れたらどうしますって話ですよ。それが自分の身に降りかかってきたときに、やはり誰に相談していいのか分からなくなる。全員が、例えば息子や娘が相談相手になるかということもそうでもない。自分で考えている人たちの方が多いので。それから奥能登の方々って、僕的感覺ですけれども、僕は田舎の海岸の方の育ちだからだけれど、同じような匂いがするんですよ。自分らで全部完結してきたので、人に頼るってことがなかなかできないんですね。もしくは頼ろうとしないんですね。自分の中で、自分の地区の中でという考え方です。よそ者に対してのアプローチはしないですね。どうしたらいいだろうって。それは本当に仲良くなれないとできないかなと思います。

ボランティアセンターというのは、災害時に、社会福祉協議会が、地域でお困りの方の片付けとか、相談とかを受け付ける場所です。さきほど、(群馬県社会福祉協議会の) 会長さんの挨拶にもあったように、阪神淡路大震災(の時)が災害ボランティア元年と言われて、新潟中越地震(の時)あたりで、ボランティアセンターを社会福祉協議会がやった方がいいねみたいな話になって、東日本(大震災)のときは、社協でやるのが当たり前みたいな形になっていました。

僕も一担当者として災害ボランティアセンターを一生懸命やらないといけないかなと思って、行政と一生懸命話をしたり、場所はどこにしようか、お金はどうしようかと、事前の話をずっとしてきました。

石巻専修大学という大学で、千人規模でボランティアセンターができるようにということで組み立てをして、調印式まであと20日というところで災害起きました。石巻専修大学、専修大学は体育系の大学なので、国公立でなくてよかったなと思います。国公立だったら20日前に前倒して、調印ができてないのに貸すということはしなかったと思う。貸すにも時間かかったと思う。ところが専修大学は、「良いですよ」って、二つ返事で次の日には言ってきたので。すぐボランティアセンターを組み立てることができたのは一番大きかったと思います。

ただ1つ社協職員に言っておきたいことは、災害ボランティアセンターは華やかで見えて、一生懸命それをやっていくってのはありだろうと思うんですけど、それをやろうとしているようでは駄目だなと。本当は生活支援をやらなきゃいけないので。だから生活支援センターが一番最初に来ないといけなくて。僕が失敗したのはそれです。

だから、後に、5月に気づいて、生活支援センターに切り換えていきました。相談をしていくことの大事さがある。災害ボランティアセンターって華やかで見えて、忙しそうに見えるけど、あんなのは、悪いけど、誰にでもできる話だなと思います。あんなのをやるのは普通。ただ、そこからのロングラン、マラソン(継続)してかないといけない。地域づくりをもう一回、再構築しないと。コミュニティーの再構築だし。子供たちが居なくなった地域を

どうしようとか。そうしたものを一緒に地域と考えていけるのは、地元団体の社会福祉協議会なんです。それと、(被災地の)外から来てくれるNPOの皆さんとどう繋がって、外の皆さんの力を発揮していただくかというプラットフォームになれるのは、社会福祉協議会の良さだと思っています。そこに着眼点を持って行きながら運営していかないと、絶対うまくいかないと思います。ただ、ボランティアセンターをやって、ちゃんちゃんで終わらすみたい。そんなボランティアセンターの運営だったら社協じゃなくてもいいと思うんです。社会福祉協議会がやるからこそ、そういったことがこれから必要になります。それから、設置に向けた準備が必ず必要になるので、これには担当行政の皆さんと膝を交えて話をしてほしいですね。そこに地域の町内会の皆さんであったり民生委員さんであったり、老人クラブの皆さんだったり、地域に力のある人たちというのはたくさんいますから。石巻でも今66人の方が登録してくださっていて、地域の方が。資材を洗ってくれたりとか、あと(ボランティアを)受け付ける係をやってくれたり。

地名っていろいろあるじゃないですか。地名ってなかなか読めないんです。イシノマキ(石巻)って、今は皆さんに(正確に)読んでもらってるけど、「の」なんてどこにも存在してないですよ。だからイシマキじゃないですか本当は。こういう地名、もっと根底から違う地名がたくさんあるから、地元の人に案内係を買って出してもらって、地元の60代や70代の皆さんがボランティアの人を連れてその場所まで行ってくれたり、近道もしたりして案内をしますんでね。そういう案内係だったりボランティアの受け付けだったり、それから資機材を洗う係をやってくれたり。役所のOBの方なんかも、資機材洗いに毎日来てくださって。「毎日日曜日だからな、手伝うよ」と言って来てくれる人も居たり。そういった人たちが地域にいらっしゃるっていうのは、地域協働型のボランティアセンターですね。運営側ですね。

もう1つは。技術系のボランティアをたくさん呼び寄せるのであれば、その方々の動きやすい環境を社会福祉協議会がどうつくれるかということになります。

情報の共有の会議をしたり、常日頃そうした方々と繋がっていたり。繋がるというのは、ざっくり言うと、常に一緒に研修したり、自分がそっちに行ってみたり。もしくは、市内や町内にJCとかあるのであれば、JCの皆さんと一緒に活動すると。石巻では、JCの皆さんが登録ボランティアになってくれてます。常に会長さんが変わりますが、社協の理事とか、評議員、そういった役職者の方が。ボランティアセンターのスタッフや委員になっていただいて、活動してもらってます。災害が起きてもJCの大工の方や設備屋の方だったり動いてくれます。生活保護に近い方であったり、お金のない年金生活者の方の修繕系は、JCにお願いしてます。部材を社協で買って、JCにお願いするという流れなんかも、今は多分あります。だから、その市ごとに完結できたりします。

今、石巻の場合は20団体、生活支援団体も含めたら30団体ぐらいあるので、そういった団体さんを(束ねて)、「石巻災害支援ネットワーク会議」を作ろうと思っています。それを作ることによって、みんなで役割分担を担えばいいなと思っています。

他の自治体でボランティアセンターをやるときも、倉敷なんかも、民生委員さんがずっと受け付けでね機能してもらいました。各単位民児協ってあるんですが、その単位ごとに交代で来てくれたり、受け付けをずっと（やってくれて）。広島なんかもそうですね。そういうものもあるので。設置に向けた準備というのはどこからやればいいのか。ボランティアセンターをやるには、先程言ったように、生活でやらないといけないということと、地元にはいろんな人がいるのでその人の効果的な協力のあり方みたいなのを膝を交えてしゃべってみるとか、そういったことが非常に必要になります。

被災者中心で、地元主体で、協働なんですね。だから最初にこの、地元主体というのをちゃんと軸足として持ってないと（いけない）。誰も助けに来なかった場合は、単純に（地元民だけの）ボランティアセンターをやることになっちゃうから、地元でどのぐらい育成できるかという部分は非常にウエートが高いです実は。

だから小学生に対してもアプローチをして、小学生の皆さんがこれからの活動ができるような形（にすると）。資機材の洗い係に小学生が2人ぐらいずつ来てくれますよ石巻の場合は。学校から帰ったら洗い場に来て「手伝うよ」って。長靴履いて手伝ってくれるんですよ。そういうスタッフにあと感謝状を出して、社協の方でね。

それで、お母さんたちと一緒に（話した時に）、「この子自体が、いろんなことを学ぶことができた」ってお母さん方にも言ってもらってました。社協の人だったらわかるでしょうが、ある意味福祉教育の一環としてできていたりしますね。

地域の中で、どうしても共存型のボランティアセンターのあり方ってのは出てきます。先程僕が言ったように、いろんな方々が「災害に強い地域づくり」をスローガンに、これから起こりうる災害に直面したかのような心持ちでやらないと、本当の訓練にならないし、本当の「気持ちの整理」ができないと思います。テレビの外側、自分はテレビを見る側にずっといる感じで居ては駄目だと思っています。ずっとその土壺にいて、自分がもしかしたら被災者って言われるかもしれないと思ったときに、初めて準備したり、お互い協力できることは何かと探れるのかなと思います。

実際のところの活動ってこれ一部触ってますけど、具体化を話したり、今藤岡の藤ボラさんなんかは僕も一緒に活動させてもらったりしています。近藤さんって女性の方でリーダーがおられますけども、藤ボラさんと一緒に現場をやったりとかいうことも秋田から福島の間、去年のシーズンだけでもずっと長く藤ボラさんと一緒にいたような気がします。今回も珠洲にずっと来ていただいて、群馬から彼女らが中心になって、参画をしていただいて、床板を剥がしたりとか、屋根の上に登ったり、というようなことをされています。そういった方々も群馬には居るので、そういった方々と皆さんで調整しながら。あと人材の育成して。（そうやっておけば）機能していくのかなっていうふうに思います。育成もしてないで当てにすることはできないので。それはあまりにも勝手すぎるというか。育成してないものは絶対来ないし、関係性も無いものは来やしないですね。それはすぐにはっきり言いましたね。

まずは地震があったのでたくさんの方が来てくれたんですね。前の5月の地震で関係性があったから。だからたくさんの方が珠洲を訪れてくれて、「大丈夫？」って言うんだけど、なかなか群馬でその災害があって…というのが無かったりすると、群馬の中で育成をしていくということにシフトしていかないと、せめてその藤岡（の団体）さんとかが、やってくださってる人たちがいるので、そういった方々、他のメンバーもいらっしやると思うので、ぜひそういった方々と（組んで取り組んでください）。カテゴリ的には結構あるので。炊き出しの支援もあるし。あと、例えば避難所の支援、それから児童生徒の困りごと、遊び場がないなんていうところの支援だったり。あと高齢者の皆さんだって、実は高齢だというだけで実はびんびんしてるじゃないですか。今の60代、70代って若いんですよ。昔と違って。そんな感じがしますね。ただ遠慮なさってる方が多いと思います。そこを遠慮しないで、ぜひ協力をしてもらえる範囲でいいので、ぜひぜひ出てきてほしいなっていうのを石巻でも今言っています。

老人クラブの会長で、この間も、たまたま私の学校の先生で、学生の時の恩師なので、先生ねって、年金使ってもらってぼうっとしてって、「ぼうっとしてっていうな」なんて言われました。ぼうっとしてカラオケ行ったり、旅行へ行ったりは良いけれど、「先生、もう一花咲かせて、していったらどう？」って言ったら、「う～ん確かにな」って言って。「何か遠慮がある。でしゃばりなんじゃないかなっていうのがあるんだ」などと先生はおっしゃってましたけど。「いや、そうじゃないよって。今からでしゃばってもらわないと困るよ。大体若いのが少ないんだから」って。「今からは、先生たちが出しゃばってもらって。ぜひぜひ、地域を元気にしてもらってから、あの世に行ってください。それは後進の我々が追従しますから」という話をさせてもらってます。

僕、今、民生委員に手上を挙げているんですけど、民生委員になりたいっていうことで。民生委員になりたいっていうのも珍しいとは思いますが、私は知識も技術もあると思っています。一般の人とは違うと思っています。私みたいのが民生委員になった方がいいのかなとは、一部思っています。制度も知ってるので。介護保険制度も詳しいですし、住民さんをずっと、30年間以上面談をしてきた人間ですから。自信も無いわけではないです。なので、民生委員として活動したいなっていうのはちょっと思っています。

ただなかなか、こうやって、ここでしゃべってますが、明日は医師会に行って、そのまま岐阜行って、珠洲行ってと、また繰り返すので、こんなに（地元）に居ない人間が民生委員になって良いのかなっていうのはちょっと、どこかで引っかかっております。それで迷ってはいます。

今、災害ボランティアセンターに特化した話でお話しましたが、NPOに特化して支援団体と共有するのじゃなくて、もっと群馬の中にはいろんな方々、人材がいらっしやると思うんですよ。その人材の発掘をなさるとか、やっぱそれをグループ化していくとか、そういったものはやっていかないと（いけない）。この間、四国で話をしましたが、四国の方で大学の先生が、「四国で、香川県で、何かあったときに、大阪とか兵庫と繋がってるから大丈夫

だ」なんて話をしてらっしゃったんですよ、馬鹿なことってんなと思いますよね。あっちも被災するんですよ、南海トラフって。大阪にも津波は入るんですよ。神戸にも入るんですよ。そうしたら手伝いどころか、自分とこも大事じゃないですか。だから徳島には誰も来ないよ。自分らでやらないといけない。だから、今から防災とか真剣にやらないと、後で「うわーっ」てなる。誰も来てくれない。計画停電になって、1ヶ月以上、生産物が生産されなくなるんです。そういうことをもう言ってるんすよ、いろんな人がね。四国はね。

だから、本当に真摯になって、たかをくくってないで、本気で用意しないと、丸亀とか、やっぱり香川県なんか水がめがたくさんでしょ。あそこは高い山がないから。うん。だから水が溜められないんですよ。水がめがたくさんあるんですよ今のところ。あれが地震でぶっ壊れたらどうすんですかって話です。水はどこから供給されるのか。そういった話なんかも、ちゃんとこれから必要になります。

石巻の場合、こうやって、皆さんの各市町も、もしかしたら地図っていうかね、自分の社会福祉協議会の職員さん向けにこれ作ってみてました。自分の社会福祉協議会を真ん中に置いて、いろんな戦力、もしこれから災害が起きて、協働型のボランティアセンターをやって言ったときに戦力はどのくらいあるのか。自分らで客観的に判断できてるかどうか。うっすら繋がってる部分、例えば矢印の方向と、太さですね。遅ければ細いなりに、ちょっと電話したりぐらい。顔見知りぐらい。やりとりをされていて、管理もしてるというのは太い線になるし。そうした関係性っていうのは必ず出てきますから。

だから私は、ビガップ石巻って地元NPOのところにアンダーラインを引いてますけれど、あそこに存在してます。あともう1つ。(私が)存在しているのが、災害ボランティア登録者というところで、「石巻おっさんクラブ」というところに、私は事務局なので(存在してます)。あんまり言うのもあれですけど、IOCという団体なんですね。どこかの素晴らしい大きな国際的な団体のように聞こえますけれども、石巻おっさんクラブと、たまたま頭文字がかぶっただけなんですよ。これは遊び心の中で、50歳代や60歳代のチームなんです、これ。だから、老眼になったら入れるおっさんクラブなんですね。女性は何歳でも構わず入って良いことになっているので、おっさんなので女性が飲み会に来るのはもちろんタダで吞ませてあげてますけども。そういったおっさんたちが社会貢献のためにやってる、これJICのOBなんすよ実は。みんなJICのOBだったり、ライオンズクラブに入ってる人もいれば。こういった人は、人脈を持っているので。だから災害時に強い、災害時にはいろんな人が集ってくれて、石巻社協を応援します。なので、石巻社協はどんと構えてプラットフォームになってもらうだけで、我々自体が共同化を図っていくので、多分大丈夫だというふうに思います。

だから、五、六年前に石巻で1万世帯が床下浸水、520世帯が床上浸水になったとき、この手助けももらわず、石巻だけで完結しています。それは地域の皆さんの頑張りだった。もちろん、NPOとか、石巻市内で活動されてる方、それから石巻社協自体がいろんな人と繋がっているからこそできています。テレビ報道もなかったし、実際のところ、視認がない

とテレビホットなんてないですからね。そういった意味では、完結できてるってのは非常に大きいのかなと。(東日本大)震災から数年を経て、やはり、いろんな人たちと繋がりを強めにして、それで今があるから、何かの災害で余程でっかいのじゃない限りは、石巻(から)よそに助けを求めることはない。この位の自負を持ってやることって大事だし、会議をすることによって、こういう事業を円滑に進めることができるんですね。

たとえば、側溝掃除って、皆さん、ボランティアだけにやってもらうというのはありえないんですよ。だから、区長さんとかに、「ボランティアさんが行きますから」って。「何月何日に行く」、「側溝掃除しますので、町内会の皆さんも集めておいてくださいね」と(伝えます)。(そうすると)一緒にやった結果、ボランティアの人も、ありがとうと直接住民さんから言ってもらえるし、その地域に愛情を持ち、地域の人と触れ合うと。ところがボランティアにだけ側溝掃除をさせてしまうと、ただの人夫じゃないですか。これは違いますよね。月～金と仕事してきて土日にボランティアに来る人に対して失礼極まりないじゃないですか。そんなこと皆さんしたことあります？。月～金と仕事して土日ずっとボランティアやるなんて。「趣味の領域だから、あいつは馬鹿なんだよ」みたいなことを言う人が居るかもしれませんが、でもそれありがたいバカですよ。僕らはすごくそういう人に支えられてきたので。だから感謝の意が強い。だから彼らに対してのリスペクトは忘れちゃいけないと思っています。

今回、石川県でもね、「ボランティアたくさん来てください」って今回、県がね、アナウンスを始めてくれてます。ただ、ボランティアに来てくれ、ボランティアが行けば大丈夫だ、という考え方は、「人夫扱い」と一緒なので、これは、いつかひと言、物申したいと思っています。今、言う時期じゃないので。そういう意味から、側溝掃除など1つとっても、町内会の人誰も来なかったところは、その町内会からボランティアを引き上げましたから。「引き上げさせてください、これ人夫じゃなくボランティアなので」と。会長さんに、約束が違う、それは違うんだ。やはり、会長さんたちもみんな一緒に、役員さんも出て来てやらないと嘘なんだ。それは、社協職員として、僕の、やはり、最低限守るべきルールでした。

ボランティアセンターってこういうふうに殺伐とするし。午前7時ぐらいからすごく並ばれるんですよ。当時のボランティアセンターって、7時位から8時ぐらいまでの受け付けが非常に長い努力。最大2,600人が石巻専修大学というところでボランティア活動してくださいました。1日あたりですよ。1日あたり2600ってなかなかの数字なんです。それを、応援社協の皆さんとかたくさんの人に支えられて、10時半まで出すことができていた。マッチングを2600人、10時半までって、なかなかの代物ですよ。あれは相当みんな無理をきいたのではないかなと思います。

それには前もっての段取りが非常に大事でしたね。ボラバス。例えば明日20台来る。50人乗りが20台ですからね。とんでもない数字が来るわけですよ。それをどういうふうに調整するかというのは、地域とすごく組み合わせて、地域の、コミュニティーマッチングをできるかどうかにかかってくる。完全に1件1件ボランティア調整してる暇は無かったので、

地域と調整していった。その結果、区長さんとか民生委員さんが地域で褒められましたよ。区長さんが居たから助かった、民生委員さんが居たから助かったって。だから、社協が居たから助かったって言われるのが一番後で良いんですね。一番やっているのは、地域の皆さんが、活動なさってる人達が、どういうふうに今おやりになってるのかを現場で知って、それを調整するっていうことが、社協の役割だと思っています。

ボランティアセンターって、役割分担があって、総務班、受け付け班、ニーズ班、調整班、資機材班とありますけれども、それぞれに役割が貴重なほどあります。今回、資機材班に行ったから駄目だったとかいう社協職員が居ましたけれど、ありえない。そういうことを言うより、もうちょっと自分なりにできることも、あとこれからの災害を、奥能登でどうだったのかっていうのを、ちゃんと考えてきた方がよかったかなと思います。厳しいこと言えばそういうことです。

民生委員さんとかたくさんの方々、その地域におられるし、その人たちとどう連携協働しながら地域でボランティアセンターをつくれるのかというのが1つと、もう1つをして協働っていう名の元にやるとすれば、NPOの皆さんでできる人たちとつながってるか、もしくは地元でどう育成できているかというところになりますから、ポイントとしてそこを押さえていただければと思います。

今から6年位前に、内閣府で3者連携の本を出したんですね、行政と社協とNPO、この3者の連携が必要だって出したのですけれど、今もう、これは4つ、4者連携に変わってきています。企業というのがプラスされました。企業、群馬県内に企業たくさんあると思うのですが、その企業の皆さんとどう繋がるかっていうのも、社協の中では大事なことになります。石巻では、石巻合板という、合板はベニア（板）を作ってる会社なんですけど、そこと社協が繋がっています。だから、何かあったときに合板会社にベニヤを分けていただいたりということができるようになってます。お金で払うのではなくて、そういった社会貢献の中で、応援になってくれたりということができたりしますので、ぜひそういったところとどう繋がるのか、というのは非常に大事です。

あと最後の方になってきましたけれども、日常から困ってる人ってさらに困るんですね。日常何にも困ってない人も災害って困ることになるんですね、家を失ったりとか。水が来ちゃって使い物にならなくなったり。大事なもの、そういったものがすべて失われてしまったり。心にポカーンと穴が開いたり。家族を失ったなんてなったらもっと最悪ですよ。そういったものがまずあるっていうのを、生活再建の中では理解をしないとイケないっていうのが、大きく1点あります。

それから、これ薄くて見づらいですけど、我々が知りえているのは、皆さんも初見の相手に、全部言いますか、言いませんよね。ちょっとしか言わないよね。全部は言わないよね。実は息子と仲悪い、あの嫁気に入ってないんだとか、そういった話ってのは多分自分の胸のうちとか本当にどっかにしまってますよね。義理のお母さんがとやかく言うから私あのうちとちょっと根底的に合わないんだとかっていうのは、絶対に聞かないから、僕らが言ってる

の、見えてるのっていうのは一番、ちょっとしたところしか見えてないですよ。それでわかった気であるっていうのが大変ですね。それがニーズだっていう状況になるのは怖い。

プロとして、そこにニーズを聞きに行くっていうか住民さんと会いに行くときに、だから今回も珠洲でお話をして応援の皆さんに来ていただいてね、他県から来ていただいたときに、オリエンテーションをさせていただいた。そこでは、社会福祉協議会から来たとか、他のNPOから来たとかっていうことは関係なく、本当にそのばあちゃんと長居しながら話をしてくださいと。それでニーズを聞きました、「困りごとありませんか?」、「大丈夫ですか?」、「大丈夫です」って終わるんですよ。そうじゃないですよ。本当は、その奥底にあるものまで聞いてくるのが、社会福祉協議会の訪問であってほしいというふうに思うので、生活相談なんですね。社会福祉協議会っていうのは何回も言いますが、第1種社会福祉事業からなってるわけですよ。他の法人と何故違うのかっていうようなことが明記されてるわけですよ。であれば、しっかりこういったことを、災害時ほど取りかかっていることを、きちっと唱ってないと。実際のところ他の法人さんとは違う。違いというのはちょっと出さないといけないかなというのはちょっと思っております。

阪神淡路からそういうふうになってきて、実際、大規模災害動で一番下に書いてありますが、コミュニティの再構築が本当に必要なんですよ。今回、すべてもう区長さんとか民生委員さんで家つぶれたっていう人は、やっぱり住めないじゃないですか。やっぱり、金沢の息子たち来いって言われれば、お父さんこっち来なよって言われれば、避難所生活をしないでそっち行くわけじゃないですか。行ったときに、地域のリーダーが居ないんですよ、今度。そういったときに、今度、再構築をしていくときに、行政では難しいです。行政が、(地域の)リーダーを決めるっていうのは難しいことになります。誰かに「代表者を出してください」というだけなんで。それしか言えないんですよ、実は。そんなところを、地域のリーダーを発掘していけるように仕向けていく。生活相談とコミュニティづくりみたいなサロンを展開をしていき、その中で(地域の)リーダーを見つけ、リーダーとして気持ちよく活動していただきながら、社協側は側面から支えていく。そういったことをしていかないと、リーダーが倒れちゃ大変ですわ。やっぱりリーダーの皆さんにただ、仕事だけ預けて「ああ、大したもんですね。ありがとうございます会長さん」と言ってるようじゃ駄目だと。会長さんたちと一緒に、活動をずっと続けていけるように、会長さんがしんどいところも、愚痴を聞いたりしながら、やはりこう、共に歩んでいけるような、地元団体としての調整機能というのが非常に大事になります。なので、ちょっと太字で書かせてもらいました。

最後になりますけれども、本当に線状降水帯(の動き)が読めない中、地震災害、それからあと首都直下(地震発生時)の受け手側、受け身的にならなきゃいけない。(東京の住民が被災して)引っ越して、その皆さんが(群馬県に)来るかもしれない、といった、いろんな状況になるのだろうと。活断層もあろうかと思えます。そんなこんなで、やはり、災害(によって地域が被る被害というのは)大きくなって来ているのは確かかなと思っております。だから、明日は我が身なんですよ、皆さんも。(海から遠い群馬県ですから)津波は来ないで

すよね。津波は来ないにしても、そういった水の災害であったり地震の災害であったりってのは群馬でもあると思うし、群馬県には、(発災後に)被災した地域から引っ越してくる人も無いわけではないということもあるんじゃないですかね。

そうしたときに、水害があってボランティアセンターをやるとなったときには、やっぱり地元が主体となって。地元で(やる)というふうに。そこに足りない分は余所から、助太刀が入る。というイメージが協働になるのかなというふうに思います。

ですから、自分のところ、地元でどれぐらいのことができるのかという想定をしておくことが非常に大事になります。自分のところの戦力を分かってなければ、何を助けてほしいのかが分からないって(なるので)、そこら辺を(地元の地域内で)膝を交えてしゃべれたらいいのかなと思っています。

僕には、冒頭で言ったように孫が居ます。孫たちの未来に対して、爺さん(祖父)としての責任の取り方を考えています。私は(自分の)婆ちゃんと爺ちゃんに、災害についての怖さも教えてもらって(いたので)、だから(海浜でなく)内陸に家を建てて(いたので)家族は守れました。息子たちの世代や孫の世代に(も含め)、我々は甘やかして育てられた世代なんですね。高度経済成長で、ここにいらっしゃる先輩方の中には、働くざるもの食うべからず主義でガンガン働いてきた方々もおられると思います。そこから、ぬる湯に浸かった我々世代がいて。今度、我々世代は、災害が多くなる世代になっているので、これからそれを後世に伝えていかないといけない。それからあと、もう1つさっきちらっとお話させてもらったんですが、ぜひ先輩方にでしゃばっていただいて、地域の中に出てきていただいて、我々に後姿をどんどん見していただいて、我々はその後ろ姿を見ながら、後世につないでいきたい。

地域にはね、たくさんの計画もあります。実は行政に総合計画があったり、それから地域福祉計画ってのがあります。社会福祉協議会にも、地域福祉活動計画だったり、強化計画っていうのがあります。本当にその計画が、ちゃんと未来に繋がるのかっていうのを(考えて)もう1回書き直す必要があるし、本当に未来のね、理想だけを作るような計画ではなくって、以前によく、石巻の社協の会長さんがおっしゃったのは、「自分たちが手の届くところから計画を作る。そうじゃない計画は作るな」と。で、段階的に進んでいけばいいんだよということをおっしゃってくれたし、「それをちゃんと話し合える場をつくれれば」と言われたので、非常にそういった場の作り方というのを大事にしてきたように思います。

私自身がこれからやっていくことも、恩返しがたくさんできたらいいなと思いますし、ぜひ皆さんにも、地域に出張っていただいてそれを社協の皆さんが、地域の方々をどう支えていくか、どう連携していくかっていうのは、多分これからの災害にも向き合える協働型のやり方の入口になるんじゃないかなというところで、今日のお話を終わりにさせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。